



日本語ができない患者が安心して治療を受けられるよう支援する医療通訳の活躍が期待されている。日本を訪れる外国人が増え、2020年の東京五輪開催を控えて需要が高まるのは確実だ。積極的に取り組む病院があるほか、国や東京都も対応に乗り出した。

## 外国人観光客増・東京五輪控え

# 需要高まる医療通訳

8月上旬、りんくうと、医師が「無理に食分を十分取ってください総合医療センター(大阪府泉佐野市)の産婦人科。岸和田市在住で妊娠中の謝丹丹さん(25)が「食べるとむかむかして吐いてしまう」と中国語で医師に訴えた。

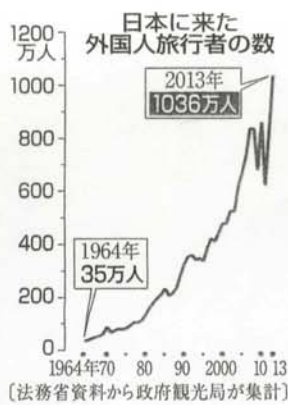
通訳の郭静儀さん(49)が日本語に訳す診察を受ける謝丹丹さん(奥)と医師の間で通訳する郭静儀さん。8月、大阪府泉佐野市のりんくう総合医療センター



中国語で伝えた。謝さんは近所の病院では中国語が通じず困っていた時、医療センターを紹介された。「細かい質問にも答えてもらえるので安心」とほほ笑む。

通訳は医師にとって重要な。同センターでは65人の有償、無償のボランティアが活動する。国際診療科部長の南谷かおりさんは英語やスペイン語でも診察するが「正確な診断や患者が理解している

## 採用に補助金 ■ 病院で語学研修



か確認するには通訳が欠かせない」と話す。センターで通訳に支払われる報酬は1日5千円と交通費。「さらに高い報酬と身分を保障する仕組みが必要」と南谷さん。

症状を聞くときに必要の高山喜良さんによるな英会話を外国人講師と、通訳の基本は「足から学ぶ」。

8月中旬に都立広尾病院で行われた研修では「予約のない患者への対応」を想定、看護師や薬剤師ら8人が案内役と患者役に分かれて練習した。オーストラリア人講師は「身ぶりも交えろと、伝わりやすい」と助言した。

医療現場での通訳は高い語学力やとさの機転が求められる。医療機関に通訳を派遣するNPO法人多言語社(横浜市)は言語別に2カ月に1度の勉強会を開き、レベルアップを目指している。事務局話した。

法務省によると、在留外国人の数は約200万人(13年末)。政庁観光局の集計では、13年に日本を訪れた外国人旅行者は1千万人

省は本年度、全国10病院で英語、ポルトガル語、中国語の通訳の採用に半額を補助するモデル事業を実施。東京五輪開催までに30病院を公募で選ぶ予定だ。

東京都も外国人患者に対応するため、本年(横濱市)は言語別に2師から説明を受けている。緊張するが、感謝されるとうれしい」と